くらしは文化 no.77

愛知県犬山市

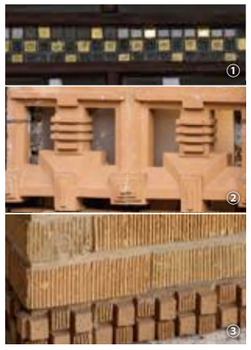
帝国ホテル・ライト館

近代建築の巨匠、F・L・ライトの幾何学模様と光をまとったホテル

帝国ホテル・ライト館は近代建築の巨匠、フランク・ロイド・ライトの設計で大正12（1923）年竣工。美しい装飾で「東洋の宝石」と称された。営業停止後、中央玄関部分のみが愛知県犬山市の博物館明治村へ移築されて昭和60（1985）年から公開。国登録有形文化財。

大谷石などを駆使して飾られた帝国ホテル・ライト館の中央玄関部分。近づくにつれ多様な彫刻や、長手方向の目地を目立たせて水平を強調したすだれ煉瓦が目を楽しませる。

車寄せの上にある水玉のような彫刻。

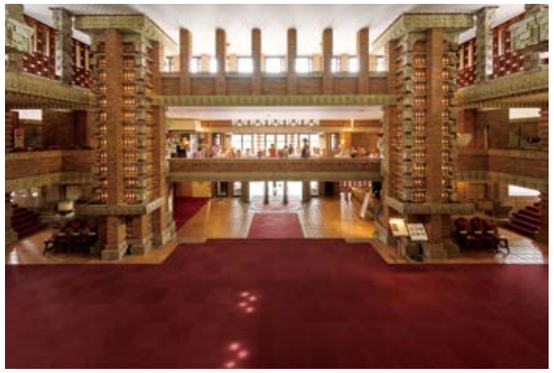


外観の装飾。①ステンドグラス②透かしテラコッタ③すだれ煉瓦（オリジナル）

軒の銅板を通った日光は館内で光の模様を描く。

フロントの天井は低い（写真右）。階段を上ってロビーに出ると開放的な吹き抜けになり、変化が際立つ。創建当初、天井は白色にきらきらと輝いていた。

「光の籠柱」。透かし彫りから照明の光がもれる。メンテナンスの際は、つるべのように紐を引き開口部まで照明器具を移動させる仕組み。



3層吹き抜けになったロビー。3階の木製スクリーンから差し込む外光がフロア中央に木漏れ日のような美しい形を映す。かつては館内の至る所に盆栽などの植物が飾られていた。

2階東ギャラリー。ロビーからラウンジ、ティーバルコニーのフロアを経てここに着く。

「孔雀の羽」と呼ばれる大谷石の大きなブラケットは見る人を圧倒する美しさ。

①柱と壁泉の間にある数段の小階段を上ると広いラウンジに出る。②階段裏は細密なデザインの銅板で飾られている。③中2階のラウンジ。左右に婦人用、紳士用が分かれていた。

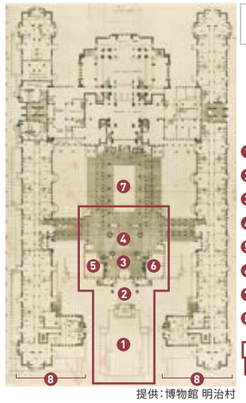
ロビーでは、ライトがデザインを手掛けた照明器具が使われている。

帝国ホテルは、増加する訪日客向けの迎賓館の役割を担って明治23（1890）年に創業。その2代目本館がライト館である。F・L・ライトは、幾何学模様を彫刻した大谷石や櫛（くし）引き文様のすだれ煉瓦（れんが）、透かしテラコッタなどを用いて建物の内外をくまなく装飾し、華麗な建物を造り上げた。なかでもロビー四隅に配された「光の籠柱」は、装飾内部に照明を仕込み、行灯を思わせる光で来館者を魅了する。

ライトは日本文化に敬意を払っていたとされ、シカゴ万博では鳳凰殿を見て日本建築に感銘を受けたという。中央玄関の外観は鳳凰殿同様にほぼ左右対称であり、銅板葺き屋根は斜めから見ると瓦屋根、玄関横の9本の柱は格子のようで日本建築を連想させるともいわれる。館内では天井高を抑えたフロントからロビーへ進むと一気に吹き抜けが広がるが、この抑制と開放の感覚は茶室のにじり口に近いと考えられている。吹き抜けを囲むフロアにはスキップフロアがあり、柱を回る小階段や壁泉で飾られた小階段が上階へと誘う。階段付近はやや暗く、上り切ると天井が高く明るい中2階へ出る。そして、再び数段の階段を上って2階へ至る。しっかりした壁はないが階下からフロアは一望できず、移動することで見えてくるフロアや、流動的につながる空間が印象的である。

ライト館は南・北翼の客室棟はもとより、ダイニングや劇場、宴会場も擁するホテルとして竣工した。開業披露の日、関東大震災に見舞われたが、低層の建物だったことなどから倒壊は免れている。館前の池の水で従業員が消火を試みたことも被害を抑える一助になった。

ライトは竣工前に離日、その後を弟子の遠藤 新に委ねたが、日本に残した貴重な建物は保存運動を経て、一部ではあるが博物館明治村に移築されて大切に受け継がれている。



提供：博物館 明治村

提供：博物館 明治村

残されていたファブリックとAIの機能でモノクロから色調を再現した客室の写真。中央の柱前は暖房兼照明装置。壁の菱形模様は換気装置でもあった。

特別展 帝国ホテル・ライト館竣工100年記念
東洋の宝石 博物館 明治村にて開催中 2023年12月17日（日）まで

用語説明

【大谷石】宇都宮市大谷町付近から産出する石材。凝灰岩の一種で淡青緑色。軟らかく加工が容易。

【シカゴ万博】1893年、米国シカゴで開催された万国博覧会。

【鳳凰殿】シカゴ万博の日本館。京都府にある国宝の平等院鳳凰堂がモデル。

【壁泉（へきせん）】壁面に彫刻などで飾った口を設け、水を噴き出すようにした噴水。

【ブラケット】壁や柱から水平方向へ突出する部分を支持する材、あるいはその役目を果す部分。装飾的に造られる場合が多い。

愛知県犬山市字内山1番地／協力：博物館 明治村

開館20周年記念展／帝国ホテル二代目本館100周年
フランク・ロイド・ライト 世界を結ぶ建築
2024年1月11日（木）～3月10日（日）
パナソニック 汐留美術館

くらしは文化 バックナンバー